

2018 年秋季大会・一般研究発表要旨

レヴィナス『全体性と無限』における自由の時間性

小野 和

本発表では、レヴィナス『全体性と無限』における、自我の時間的な在り方の議論を分析する。その際、自我に与えられた諸々の時間的規定の結節点として、現在において成立するとされる「自由」の議論を手引きとする。「自由」がどのような前提を持つかを手引きとすることで、現在という自我の時間的な在り方を、現在の過去の側面・未来的側面に還元されないような、「過去」と「未来」への志向を有するものとして再構成することを試みる。

レヴィナスは（ある意味でフッサールと同様に）自我の生きる現在の中にその過去の側面と未来的側面が含みこまれていると考える。その際、本来の意味での「過去」や「未来」は、現在から断絶し、以上のような現在の過去ないし未来に還元されないものとして考えられている。レヴィナスの立論においては、この断絶をもたらすものが分離と呼ばれる自我の在り方である。自我は、形式的に表現すれば、他のものに依存しないという形で自らの同一性を保つという在り方をしており、このような在り方をするからこそ、現在という在り方における自我は「過去」の影響から解放され、自由をもつに至る。けれどもこのとき、自我を表象の対象に還元するような時間概念（歴史的時間、客観的時間）が拒絶されることが明確であるにしても、それでは自我に関するいかなる積極的な時間規定が提示されているのか、また、それらの間の相関はどのようにになっているのか、この二点はそれほど明瞭ではない。

以上の点について本発表でははじめに、レヴィナスによる「存在論」と「多元論」の区別を分析することで、『全体性と無限』における自我に適用される時間概念が、歴史的・客観的時間とは区別されねばならないことを確認する。次いで、同書二部の享受論、居住論および第三部の真理論を分析することで、くわれわれが日常的に過ごしているような、時間的スパンをもつふるまい（意図的行為・意識的表象）が可能である段階に伴う二つの成立契機（時間的自我および連続的空間の成立、意味の成立）として、われわれの自由が成立する「現在」のなかに、享受に由来する記憶しえない「過去」と他者を通じた予見しえない「未来」への志向があることを確認する。最後に、「自由」の成立をめぐるこれらの分析が、『全体性と無限』において自我に適用された諸々の時間契機の総合の一助となるという展望を示すことを試みる。

哲学は政治と相渉るだろうか

安藤 歴

本研究発表では、哲学による政治の基礎付け、および哲学の政治化、またその諸帰結を主題とする。現在、哲学と政治の結合は全体主義をもたらす、という主張がなされることが多く見受けられるが、両者の関係がなぜどのように全体主義をもたらすのかという内実が十分解明されているとは言い難い。まして政治と哲学はいかなる関係にある（べきな）のか、という問いへの応答は混迷を極めているように思える。このような状況を念頭に置きつつ、発表者は主にフィリップ＝ラケー・ラバルトのハイデガー論を検討しつつ、哲学と政治の関係を以下の2点について問題化する。

・起源と模倣のジレンマ

：ラバルトはハイデガーの1933年の政治参加、つまり大学総長就任とナチスへの関与について、なぜそれが可能になったのかを問題とした。彼の答えは次のようなものだ、ハイデガーが哲学による基礎付けの身振りに政治を従属させることによって。哲学は政治を基礎付けるという関係において政治と交わり、その結果哲学の政治化を引き起こす。ラバルトはこの哲学主義的政治に起源への虚構的な同一化、つまり存在しない起源を虚構的に作り上げそれを模倣する身振りを見出す。この模倣は虚構を自らの真理として受け入れるという点で不可能であるが、この不可能なことをなさなければならないということが哲学にとってのジレンマとなる。

・決断主義、主意主義への批判

：ラバルトは上のジレンマに対してハイデガーが決断主義、主意主義の立場を取ったことを問題とする。これは哲学と政治の断絶を示していると捉えることができるだろう。つまり、哲学により政治を基礎付けることは決断により両者の垣根を飛び越える必要があり、哲学と政治は何らかの媒介を通じてしか一体となることがない。決断主義や主意主義はこの媒介の役割を果たしたのである。逆に言えば、哲学と政治はこの媒介を介して無理矢理に結び付けられる（縫合される）ともいえる。ラバルトはハイデガーのヘルダーリン講義は以上のような国家社会主義の一体化の批判となっているという読解を行っているが、ハイデガーにラバルトが見出す国家—唯美主義も自己実現の意思、作品化への意志を基底にしていると指摘される。ラバルトは自己を実現しようとする意志が全体主義をもたらす動力として批判するのである。このような意志が哲学による政治の基礎付けを志向したハイデガーの軌跡に潜み、その政治性を作り上げるものであった。

最後に、発表者は政治と哲学についての「無意志主義」ともいえるような立場として例えば「無為」のような概念が想定されているという見通しを述べることにする。

「感情」を「事実の糸」として辿るベルクソン — 『意識に直接与えられたものに関する試論』第一章読解を中心に —

磯島 浩貴

本発表の目的は、アンリ・ベルクソン（1859–1941）の最初期の著作『意識に直接与えられたものに関する試論』（以後『試論』と略記する）第一章で展開される「感情」の議論を、「緒論 I・II」（『思考と動くもの』所収）で整然と示された「事実の糸」に沿うというベルクソン哲学の方法論を踏まえて内面的に読解することである。また、この目的を鮮明にするために、私たちはバートランド・ラッセル（1872–1970）によるベルクソンの空間論批判を取り上げる。

なぜラッセルによるベルクソンの空間論批判を取り上げる必要があるのか。それは、ラッセルが初期ベルクソン批判の論文である「ベルクソンの哲学」において、ベルクソンの空間論は『試論』第一章と第二章の中で述べられていると断言するからである。そこでラッセルが着目するのは、『試論』第一章で展開される「より大きいとより小さい」という区別を強度 *intensité* と大きさ *grandeur* に同一の形で当てはめると悪循環に陥る、というベルクソンの議論である。この議論はベルクソンの空間論の基礎となっており、『試論』第二章冒頭の数論は「より大きなものはより小さいものを包含する」という議論を適用している、とラッセルはいう。そこから、ベルクソンの哲学体系は時間と空間に尖鋭に分かれた二元論だ、という結論をラッセルは引き出してくる。

私たちは、このラッセルの読解の難点をベルクソンの立場から指摘することのみを目指すものではない。むしろ、ラッセルの指摘から引き出される次の二つの事柄に着目しながら読解を進める。一つは、ベルクソンが『試論』第一章で空間論を展開している、というラッセルの指摘である。もう一つは、ベルクソンが『試論』第一章で展開する「感情」の議論をラッセルは看過しているという点である。実際、ベルクソンの「感情」の議論を無視する形で『試論』第一章を読み、そのまま『試論』第二章に進むと、『試論』は時間/空間、精神/物質、心理的事象/物理的事象など通約不可能な尖鋭的二元論を保持しているように見える。

しかし、いわば図式的に示されたベルクソンの二元論を、ベルクソンは『試論』第一章で提示しているのだろうか。このことに関する精査が本発表で取り扱わなければならない問題である。それゆえ、『試論』第一章が空間論であることを受け入れた上で、ベルクソンの「感情」に関する議論を読み解くことを私たちは試みる。すなわち、『試論』第一章の「感情」に関する議論をベルクソンと共に辿り直すことで、通約不可能な尖鋭的二元論を保持するベルクソン像が妥当か否かを再考する。それは、ベルクソンの「感情」に関する議論を一つの「事実」として読み解いて行くベルクソンの姿を描くことになるだろう。

ジャック・デリダにおける根源的な性的差異と可死性 ——『生死』講義を起点として

吉松 寛

本発表はジャック・デリダの1974-75年度講義『生死 [La vie la mort]』（近刊）におけるフランソワ・ジャコブの『生命の論理』読解に端を発するものである。生と死についての言説における「再生産＝生殖 [reproduction]」概念がテーマとなる同講義においてデリダが目にするのは、性と死が生命の歴史において遅れて登場し、原生生物たるバクテリアは分裂による単性生殖を繰り返すことで死を免れているというジャコブの主張である。これに対しデリダは性と死を周縁化する当のジャコブの言説のうちに、すでに性と死を前提としてしまっているという代補の論理を見出している。

デリダのこの挙措のねらいを検討するために、われわれはまずデリダが性的差異を論じた「Geschlecht ——性的差異、存在論的差異」を検討する。この論文においてデリダは、現存在は無性的である、という『論理学の形而上学的な始元諸根拠』におけるハイデガーのテーゼに注目している。現存在の無性性とは雌雄の性のいずれにも属さないということであり、これは二元論的の性に対して向けられた否定である。しかし現存在は事実的なものとして、具体的な身体へと散種されており、その身体には^レら^ズも性があるという論理に焦点が向けられる。この現存在の散種の次元へと立ち戻ることで、現存在における二元的な図式に支配されない性の可能性をデリダはハイデガーのうちに読み込む。

このような性と、先のジャコブ読解における代補の論理を結び、両者を解明するためにわれわれは『快原理の彼岸』におけるフロイトのアウグスト・ヴァイスマン読解と、同箇所を注釈する『絵葉書』所収のフロイト論「思弁する——フロイトについて」を扱う。『彼岸』においてフロイトは生の欲動と死の欲動に関する自らの仮説を展開するなかで、ヴァイスマンの生物学的仮説を引く。ヴァイスマンもまた原生生物における不死を主張するが、フロイトはこの仮説と自らの死の欲動についての思弁は両立しようと述べる。死は生命の進化で遅れて獲得された付加物であるとする生物学者の説に対して、死の可能性が先行しようと主張する点で、このフロイトの態度はデリダのジャコブに対する態度と近いと考えられる。加えてフロイトは、性が仮に進化の過程で遅れて獲得されたものであっても、性の欲動と呼ばれることになるであろうものは最初から作動していた可能性を示唆している。

それゆえわれわれは『彼岸』における当該箇所に対するデリダの解釈を経て、デリダがフロイトから引き継いだものと両者の差異とを考察する。それによって、生命現象につねにすでに内在する、雌雄という二元論的である以前の性と、根源的な可死性の両者の内実を明らかにすることを最終的に試みる。

フロイトと共なるデリダ——反復強迫と脱構築の運命——

工藤 顕太

すでに「フロイトとエクリチュールの舞台」（1966年）において明示的に述べられているとおり、ジャック・デリダの脱構築思想を構成する主要な戦略素の、例えば「差延」の重要な発想源のひとつがフロイトのディスクールにあることは疑いを容れない。なかでも『快原理の彼岸』（1920年）においてフロイトが死の欲動の仮説を軸として提示した論点の数々は、デリダの思想展開をつうじて幾度となく参照され、そのたびにコンテキストや重心の差異を生じさせながら論じ直されている。本発表で取り上げるのは、こうしたデリダのフロイト読解の歩みのなかでひとつの頂点をなすテキスト「思弁＝投機する——「フロイト」について」（1980年）である。また、内容上それを引き継ぐ議論が展開される「抵抗」（1991年）も補足的に参照する。

「思弁＝投機する——「フロイト」について」というタイトルが暗示するとおり、これは通常理解されている意味でのフロイトのテキストの読解ではない。すなわち、フロイトの駆使する諸概念の意味するところの解明や、フロイトの所説の妥当性を吟味するといった作業に留まることを、デリダは最初から、自身に禁じている。フロイトという固有名をあえて引用符に括りつつデリダが試みているのは、フロイトが「フロイト」であるという事実そのものを、そして「フロイト」という名を持つ精神分析家が『彼岸』の書き手であるという事実そのものを問いに付し、そこから発して、ひとりの主体が『彼岸』を書くことで何をしているのかを明らかにすることである。そしてここから引き出されるのが、死の欲動の顕現形態である反復強迫について論じるフロイトその人の、あたかも自身が論じる対象に同一化しているかのようにして示される反復強迫にほかならない。なおかつ、デリダは周到にも、フロイトのそうした振る舞いをさらに反復し、パフォーマンス的に反復強迫という彼自身のオブセッションを浮き彫りにしてさえいる。

反復強迫という概念に対するデリダの並外れた関心は、「抵抗」において一層鮮明に語られることになる。このテキストにおいてデリダは、精神分析と脱構築がともに書き込まれているひとつの磁場として、（抵抗としての）反復強迫の問題系を取り上げている。ここでのデリダの理路がきわめて重要なものと思われるのは、「脱構築とは何か」という問いがフロイトをぬきにしては考えられないからであるのみならず、デリダがフロイトの読解をつうじて試みた、いや、自ら引き受けた哲学の決定的な変質が、「精神分析とは何か」という問いを不可避免的に、しかもきわめて鋭利なカタチで、呼び寄せるからでもある。したがって、デリダのフロイト読解を導きとしつつ、精神分析なる実践の本質をあらためて問いなおしてみることが、本発表の目指すところである。

「イメージ」を跡付ける

天野 恵美理

ベルクソンの第二主著『物質と記憶』は、「イメージ」という奇妙な概念が冒頭から登場し、また第一主著『意識の直接与件についての試論』とのあいだに断絶があるように思えることもあり、ベルクソンの著作のうちで最も難解かつ独自性をもつ書物として知られる。とはいえ我々の見るところでは、この書物はいくつかの段階を経て練り上げられた書物であり、その成立の過程を辿ることができる。さて、「イメージ」概念は、『物質と記憶』においていわば唐突に採用された奇妙な概念であるように思われているが、我々の考えでは、「イメージ」概念についても第一主著『試論』から跡付けることが出来る。そこで、『試論』以来のベルクソンの思考の変遷の過程で、「イメージ」概念および『物質と記憶』において、何が真に新しいことなのか、あるいは、「イメージ」概念を用いることへとベルクソンを導いたのは何であるのかを見きわめることが、本発表のねらいである。以下に概略を示す。

まず、『物質と記憶』のイメージ概念のうちには、「物質」の概念規定という側面がある。すなわち、物質を「イメージ」と捉えることにより、物質という存在それ自体が、ある種の感覚質を携えたものとしてしか規定されえない、ということを示しているのである。

そして、「イメージ」のこうした側面については、『試論』において、もちろん「イメージ」という語は用いられていないものの、内容的に対応する記述が機械論批判の文脈においてみとめられる。感覚質を考慮に入れずに物質を規定しようとする幾何学的機械論が、時間や運動を取り逃すものとして批判されるわけである。さらに、そこでは物理学も、幾何学的機械論とほぼ同等のものと見做されている。

ところが、(1)『試論』と『物質と記憶』の間の時期の講義録においては、物理学と幾何学的機械論（数学）とが区別され、まさにそのタイミングで、上記の意味での「イメージ」という語があらわれる。さらに(2)『物質と記憶』では、物理学と数学の区別が一層はっきり提示されるとともに、トムソンやファラデーといった当時最先端の物理学に一定の評価が与えられるようになる。ここで注意が必要なのは、この段階において認められているのは、物理学によって時間・質・運動それ自体を捉えることができるようになった、ということではなく、当時最先端の物理学は、渦動や力線といった概念によって、哲学が扱うべきものと同一の対象を指示するようになった、ということである。

それゆえ、『試論』以降、当時最先端の科学を吟味する中で、ベルクソンは物理学に対する考えを新たにするのであり、それと対応するかたちで、「イメージ」という語が用いられるようになったわけである。このように、『試論』以降、科学との折り合いをつける過程で「イメージ」概念が生み出されたと言える。

『省察』におけるマテーシスと想像力

武田 裕紀

16世紀以降19世紀に至る数学の解析化の歴史の中で見ると、図形的な想像力に依拠した幾何学的な解法から、曲線を方程式に書き直して記号的に処理する解析幾何学への道を切り開いたデカルトは、数学における記号的・操作的な側面を発展させた数学者として評価することができる。こうした数学史観を引き受けてきた哲学研究者たちも、デカルトの哲学体系における知性の役割を強調する傾向があるように思われる。しかし他方でデカルトは、「想像力は数学に役立つ頭脳の部分」（AT. II, p. 622）あるいは「おもに形や運動を考察するさいに想像力を使用する数学の研究」（AT. III, 692）と述べるように、数学における想像力の役割を再三言明している。デカルトにおいて想像力は、数学ないし広くマテーシスと呼ばれる領域に対していかなる仕方でコミットするのであろうか。この問題は、初期の『規則論』から『省察』にまで至るデカルトの哲学体系の変遷の中で考察されるべきものではあるが、本発表では『省察』を中心に検討する。

まず始めに、「純粋数学」という語に注目しつつ、マテーシスの語義を明らかにする。純粋数学という用語は、歴史的には、光学や機械学など質料的なものを含む「混合数学」に対して、質料的なものから独立した数論と幾何学のことを指していた。しかし『省察』においては、「物体的な本性」であり、かつ「物質的事物は、純粋数学の対象であるかぎり、存在することが可能」（AT. VII, p. 71）と定義されているように、純粋数学とは物体的な本性を対象とし、それゆえ自然学にもかわることが可能なものである。次いで、マテーシスと呼ばれる領域に想像力を介してわれわれがコミットできる射程を検討する。『省察』は言う、物体的な本性であるところの連続量に関して、「私は、（…）量を判明に想像する」（AT. VII, p. 63）と。しかし、奔放な想像力を野放しにしているのではない。一方で、知性による明晰判明な認識によって幾何学の対象となるものに囲い込み、他方で、感覚という受動的な機能によって、想像されたものを安易に外的事物の存在の開示であるとみなす即断を戒めなければならないだろう。最後に、マテーシスの対象となる学問領域において想像力の果たす役割が、デカルトの科学的方法においても機軸をなしていることを示したい。すなわち、幾何学的な物理モデルを判明に想像すること、実際にそのモデルを活用することで拾い上げることができる現象を求めて実験を行うこと、もし感覚と件によってモデルとの相関性を確認できるデータが得られればそのモデルは有効とみなしうるといふこと、こうした科学的な方法は『省察』において十全に表明されているのである。

「個性性の溶解」から「個性化された存在の消滅の受諾」へ ——シモンドン哲学の病理的側面

堀江 郁智

シモンドンの哲学には病理的な側面がある。それは、とくに心理的個性化の問題を扱う際に前景化している。知覚、感情-情動性、人格という3つの問題に、シモンドンの心理的個性化論は分けられるのであるが、このなかで感情-情動性の問題は、シモンドンの議論のなかでフロイトとの相違が見られるところで、「無意識」ではなく「潜在意識」への着目という特徴に焦点を絞って検討を進めていく必要がある。この「潜在意識」の問題に関して、シモンドンが中脳という「神経系のもっとも古い層」に着目していることに、私たちはその生物学的由来を見出すことができる。この中脳に腫瘍ができることで、感情-情動性の制御に問題が出るということをシモンドンは示唆している。シモンドンはこれを「個性性の溶解」という語で呼んでいる。

この「個性性の溶解」という事態は、どのように考えられるだろうか。例えば、知覚論のなかで、シモンドンは「対象の例外性」という事態について言及している。それは、対象が対象であるのは、人工的環境、例えば実験室内のみであるということの意味している。シモンドンが考察の対象とするのは、そうでない具体的状況における「情動の価値付けの強い主体」なのである。シモンドンは例えば「激烈な知覚」に晒された主体を問題としている。この主体というのは、大きな強度を持った刺激に出会い、その刺激が意味を持つことによって幻覚に近い状況に陥るということ、シモンドンは記述している。その他の例としてミンコフスキーの患者は対象の知覚と無関係に感情の揺動が起こるとしているが、これもシモンドンは取り上げている。こうした諸主体においては、個性性は溶解してしまっていると考えられる。

さらに、より高度に個性性が壊れてしまっている状況としてシモンドンの記述のなかで見出すことができるのは「不安」の問題、つまり「不安」に陥った個体の問題である。シモンドンいわく、「不安」において個性性は溶解するだけでなく、自らの構造を無化し、古い機能を前個体的なポテンシャルへと還元してしまうということが起こる。このことについて、「個性化された存在の消滅の受諾」とシモンドンは呼んでいる。「個性化された存在」が消滅した状況のなかで、自らを問題化することで単独で個性化されてしまうということ、これは横断個体的な個性化を経ることなく、反転した意味作用のなかで自らを個性化してしまうということの意味しているのではないか。これを「新しい誕生」と呼んで良いのか。私たちは、この「不安」において起こる個性化の両義性について検討することで、シモンドン哲学の「存在発生」の病理的側面に関する一考察を行うこととした。

真であるとはいかなることか ——「第四省察」における真理と完全性——

有賀 雄大

「明晰判明な知得は全て真である」。これはよく知られたデカルトの規則である。この規則は、物体＝延長説、心身の実象的区別といった諸結論を導き、デカルト哲学の体系を特徴づける。ところで、これもまたよく知られているように、デカルトはこの規則の妥当性を「第四省察」において論証したと明言している。その論証とは、欺かざる神によって<私>が創造されたということを根拠として、<私>が明晰判明に知得するものに同意する限り決して誤らないということを示すものである。この議論についてはこれまで多くの注釈が与えられてきたが、その中でほとんど問題にされることがなかったのが、ここでそもそも真であるとはどういうことであると考えられているのか、という点である。実はこれこそ「第四省察」でデカルトが問おうとした問題である。というのも、この『省察』第四章の表題はまさに、「真と偽について (De vero & falso)」であるからだ。ハイデガーもまた、デカルトの「真であること (Wahrsein)」を明らかにするにあたって「第四省察」を取り上げている（『現象学的研究への入門』「第二部」）。我々が本発表で試みるのは、「第四省察」における真理の概念を解明することであり、それは明晰判明の規則に与えられうる意義を再考する手がかりとなるだろう。

本発表は次のように進む。1) 「過誤 (error)」の概念を、先入見を取り除きつつ明らかにする。2) 過誤を回避により達される真理の概念について論じる。

1) 「第四省察」の一つの主張は、知性の明晰判明な知得に意志が同意するならば決して人は誤らず、逆に明晰判明な知得を欠いて意志が同意するときに過誤は起こるということである。これについて一定数の論者が前提する解釈は、明晰判明な知得を欠いた同意は、偽である側を掴み取る可能性を生じ、そのようにして過誤を引き起こしうる、というものである。我々はテキストを丹念に検討することでこうした解釈を退ける。むしろデカルトが問題にしているのは過誤の本質に他ならない。過誤とは、自由を用いる仕方の「正しさ (rectitudo)」に欠けることそのものなのである。

2) 上記の過誤概念を踏まえて真理概念を明らかにするにあたり、我々は「完全性 (perfectio)」概念に着目する。自由を正しく用いないことは人間における「不完全性」であり、逆に明晰判明な知得にのみ同意するよう自己統御することにおいて「人間の最大で主要な完全性」が成り立つ。過誤は、人間が判断の作用を「引き起こすことができる」ということが、無でなく有る、その限りにおいてもつ肯定性に対する損傷であり、過誤を避けて真理に達するとはまさにその肯定性を回復することなのである。デカルトにおける真理は、現に判断を行う限りでの<私>の存在を不可欠の契機として含む概念なのである。